

映画を通じたまちづくり——映画館「ヒカリ座」を例に

宇都宮共和大学シニア学部 吉良貴之(代表)
 大木 終芽(おおきしゅうが)
 青木 良太
 高村 慶弥
 中村 駿希
 萩原 舞

【概要】

本ゼミでは法律学を出発点に、「まちづくり」を法政策的観点から考えている。今回、本ゼミが着目したのは「映画」である。映画には、制作、上映、宣伝など、さまざまなステップがあるが、それぞれに地域特有の可能性がある。今回は宇都宮市中心部の映画館「ヒカリ座」のご協力を得て、宇都宮市立城山西小学校での統廃合の危機とそこから脱却する地域の人々の姿を描いた映画「奇跡の小学校の物語」——この学校は「なくさない！」(2019年)の上映会を企画し、全員で鑑賞した。鑑賞後は監督の我孫子亘氏や出演者の方々をお呼びし、映画製作の経緯などをインタビューした。また、映画館支配人の三井覚氏や、「ミヤラジ」パーソナリティーのみなみ亘氏のお話も聞き、映画を総合的に「まちづくり」、いわば文化政策と地域振興政策の融合したものとして捉える視点を考えることができた。そして何より痛感したのは、映画を観た後にはとにかく誰かに話したくなるという、映画の力である。一人でテレビやインターネットを見るのとでは違った、人をつなげる力が映画の最大の強みであり、まちづくり大いに生かされると感じた。

1. 映画館「ヒカリ座」について

映画館「ヒカリ座」は、宇都宮市中心部のオリオン通りに位置する。かつて宇都宮市中心部には、5 つほどの映画館が存在したが、現在では郊外の大形映画館(シネコン)が主流となっており、中心部ではヒカリ座が孤軍奮闘している状態である。ヒカリ座は規模としては小さい映画館であるが、いわゆる「ハリウッド大作のような大予算映画はそれほど扱わず、低予算系の通好みの作品を多く上映している。こうした映画館は全国的にも少なくなく、おり、ヒカリ座は北関東一円から多くの映画ファンが集り、独特の存在感のある映画館となっている。

ヒカリ座が位置するオリオン通りは、宇都宮市中心部の老舗商店街だが、郊外のショッピングモールに人が流れるなどして、近年、中心市街地の空洞化対策が大きな課題となっている。しかし、コンパクトな区画に多様な商店が集まっている強みを生かし、全国的に注目される試みをいくつかも成功させている。全国に波及することになった「街コン」の原型である「音コン」(2004年〜)は特に有名な例である。

ヒカリ座はそうした地域商店街にあって、映画を中心とした文化的拠点としての存在感を発揮している。栃木県内に舞台にした映画上映・PR を積極的に行うなど、映画を通じたまちづくりに積極的である。近年のヒット作として、宇都宮市を舞台にした『キスできる餃子』(2018年)などがある。



(写真左) ヒカリ座外観
 (写真右) ヒカリ座館内
 現在はコロナウイルス感染予防のため、席間を空けるなどの工夫がなされている。

2. 映画「奇跡の小学校の物語」について

『奇跡の小学校の物語』(2019年)は、宇都宮市立城山西小学校を舞台にしたドキュメンタリー映画である。城山西小学校は宇都宮市の北西部の古賀志町地区にあるが、ここは徐々に生徒数の減少に悩んできた。2003年には、今後5年以上に複式学級が解消されない限り、統廃合の対象となることがされた。小学校は地域内の交流拠点であり、子どもたちがいなくなればその地域は急速に過疎化してしまう。新しく赴任した校長のもと、地区住民は団結して生徒数増加に向けた取り組みを始めた。地域住民の協力、地元文化人による出前授業、地域色あふれる給食づくりなど、多くの魅力的なアイデアが実現していった。そして、学区外からの入学を可能とする「特認校」制度を生かす形で、生徒数も増加していき、統廃合の危機を免れることになった。一時は枯れかけていた校庭の「孝子桜」も、現在では学校の再生を象徴するかのように美しい花を毎年咲きほこらせている。



https://mirufilm.jimdofree.com

2.1 監督や当事者の方々へのインタビュー

本ゼミでは、本作品を全員で鑑賞した後、「映画によるまちづくり」というテーマを意識しながら、監督の我孫子亘氏や、地元ラジオ局「ミヤラジ」パーソナリティーのみなみ氏らにインタビューを行った。特に印象に残ったのは以下のような点である(質問・回答は筆者が要約したもの)。

- トキョメンタリー映画としてこの問題を扱うにあたって工夫したことは？
 - トキョメンタリーは単なる記録ではなく、実際にその地域の住民と一体となって作っていくもの。地域住民に溶け込むことで、自然にできあがっていくのがトキョメンタリー映画だ。しかし映画である以上、ドラマとしての面白さも必要だ。リアルタイムで起こっていることのように見せることが大切だ。
- 監督はテレビ番組制作会社のご出身だが、テレビと映画の違いは？
 - テレビと映画で最も違うのは、「体験」だ。テレビは1人または少数者で見るものだが、映画は大人数と一緒に見る。そうすると、終わった後について、隣の人と感想を話し合ってみたくなる。文字で読む文章よりも、直接に五感に訴えかけてくるものがあるから強力だ。それによって「人をつなげる力」がある。
- ★ 実際、監督をまじえた懇談会では、上映後の熱気そのままに、通常のゼミよりも活発な議論がなされた。「何か話したくなる映画の力」を教えてください。
 - 「地元」で映画を作ることの意義は？
 - 映画には人をつなげる力がある。それは観終わった後の話だけでなく、製作、上映、宣伝、多くのレベルでたくさんの人々が関わっている。特にこの映画のように、地元の問題を扱った映画は、地域の自信になる、地域を勇気づける面がある。本作は同じく過疎化に悩む多くの場所で上映されているが、映画を通して少しでも地域に力を与えられればと思う。

3. まとめ——映画を通じたまちづくりに向けて

地元で映画を製作し、地元映画館で上映する。こうした取り組みは、「ついでに何か話したくなる」という映画の力によって人をつなげていく。これは大予算映画ではなかなかできない、小規模映画ならではの強みだと思った。また、人々は映画を観て、感想を話し合うなかで変わっていく。本作品で過疎化に悩む多くの地域の人々が勇気づけられたこともそうであるが、ヒカリ座の特筆すべき試みとして、人々によく知られていない病や、性的マイリテイの人々の人権問題を扱った啓発的な映画を多く上映していることがあげられる。**多様な人々にとって住みやすいまちづくりを映画によって実現**していくように思う思いを強く感じた。